

明治末期の地方新聞に関する一考察

—「週刊多摩新聞」を中心に—

川原 健太郎

はじめに

本論文の目的は、明治期における学習・文化活動の一形態として、明治末期の調布地域にて発刊された三多摩の地方新聞である週刊多摩新聞について考察することである。新聞は、情報を伝えるという役割を担っているが、それ以外にも読者投稿欄などを持っており、読者からの発信や読者の交流の場として、重要な学習・文化活動であったと考えたためである。

新聞、雑誌はさまざまな地域において発行されてきた。比較マスコミ論研究者の門奈直樹は地方ジャーナリズムについて「人間の生の具現化、生きることへの証明となる営みである⁽¹⁾」と述べ、地方におけるメディアの価値について指摘している。

自由民権運動の活性化をうけて、明治以後様々な出版物が発行されてきた。新聞においてもいわゆる大新聞から小新聞まで様々な形態のものがあったが、その中の一つが地方新聞である。ここで地方新聞をとり上げたのは、それぞれの地域において展開した小規模のメディアである地方新聞が、その地域密着性から、人間の学習の権利拡大において重要な意義を担っていたと考えたためである。1990年代以降、近年のメディア史研究の動向としては、新聞研究の視点の見直し、雑誌研究の本格化、非活字メディアに関する研究の活発化などがあるが⁽²⁾、ここでは新聞研究の視点の見直しの立場に立ち、特に読者との関係から学習・文化活動として地方新聞を問い直すことが一つの課題と考えられる。

素材として、三多摩における一地方新聞を具体的に取り上げ、それが地域や読者にとってどのような役割をもち、その意義は何かということについて考察する。対象には、三多摩、北多摩郡神代村（現調布市）佐須において、明治末期、多摩新聞社（主幹・中西悟玄一祇園寺住職）により発行された地方新聞である週刊多摩新聞をとりあげる。

本紙の創刊は明治末期の1909年3月10日で1910年3月11日（第36号）までの号を確認することができる。ニュース報道にとどまらない幅広い内容で、特に投稿に関する欄が多く設けられていたことに特徴を持つ。本紙の方針は「社会の裏面を観察すれば小弱なる人民が凶暴なる高圧者の為に苦める実情なしとせず、本社は弱者の友となりこれら高圧者の敵たることを期し、正論直言敢て憚ることなきを期す⁽³⁾」という立場である。これは、地方新聞のあり方として注目に値すると考えられる。

週刊多摩新聞に関する先行研究には調布市の市史等による研究が挙げられる。『調布市史』は、多

摩新聞について「発行期間は短かったが、まさに記事の内容は豊富で（中略）地域の文化活動にも大きな影響を与えていた⁽⁴⁾」と評価している。なかでも週刊多摩新聞第34号の雑報欄に掲載された「調布乱声会」での文芸研究サークルの紹介文について言及し、調布地域の文化に対し本紙が果たした活動支援の側面を示している⁽⁵⁾。しかし、週刊多摩新聞の地域的展開や読者についてはふれられていない。そこで、既出のように本研究においては、地域における週刊多摩新聞の位置づけや読者にとっての役割の視点を交えて考察を行いたい。

本研究は三つの構成によりなる。1. では明治期における三多摩の地方新聞についてとりあげ、週刊多摩新聞の成立背景の検討を行う。2. では週刊多摩新聞の概要と地域について、広告などのデータをみながら、実態や読者の及んだ地域範囲について考察する。3. では週刊多摩新聞の読者投書欄に着目し、読者に対して果たした地方新聞の役割について考察を行う。

1. 明治末期の三多摩における地方新聞

週刊多摩新聞の活動期であった明治末期における三多摩の出版物に関する動向をとりあげ、当時の地方新聞の概況をみたい。

社会学研究者の山田公平は、地方における新聞の発達について、「中央主導の近代化の中で、大新聞を中心に全国的コミュニケーションが拡大、浸透していくのに対して、地域の自立的な文化コミュニケーションを形成していく意義をもっていた⁽⁶⁾」と述べ、文化コミュニケーションを地域から支える地方新聞の役割を指摘している。

地方における新聞に関する全国的な動向には、1900年代以降における地方新聞の活躍を挙げることができよう。1922年発行の『日本新聞発達史』は、地方新聞について「日露戦争以後地方新聞の活躍は注目に値するものがあつた⁽⁷⁾」と評しており、そこでは日露戦争後に創刊された地方新聞のうち基礎の確かなものとして88紙の地方新聞の名を挙げている。

出版物の隆盛については、新聞雑誌の各種出版物の数に関するデータにもあらわれている。内務大臣官房文書課により出された『大日本帝国内務省報告』をみると、1905年から週刊多摩新聞が発行された1909年まで5年間の新聞紙及び雑誌の年末数について、1775点から2768点にまで大幅に増加していることがわかる⁽⁸⁾。

一方で三多摩地域のみに限ると、地方新聞の動向については不明な点も少なくない。「明治20年代から大正時代にかけての多摩の印刷界の動きは、記録がとほしく詳しいことはわからない⁽⁹⁾」との指摘もある。しかし、印刷所に関しては1907年頃より新規開業が増えており、『多摩の印刷史』は11の印刷所の開業を明らかにしている。ここから、三多摩では少なくとも印刷所の開業を支える体制ができつつあることはわかる。

「新聞」の名称ではないものの、週刊多摩新聞以前の三多摩における最も内容の充実した地方新聞の性格を持つ雑誌の一つとしては「武蔵野叢誌」がある。明治中期の1883年10月～1884年11月に北多摩郡府中において発行されていた本誌は、「勸懲ノ雑報公益ノ論説等ヲ輯メ⁽¹⁰⁾」られた、総合雑

誌である。本誌は新聞の形態をとってはいなかったものの、地域の新聞的メディアとしての役割をも有していた。週刊多摩新聞の第3号（1909年4月1日）において掲載された「武蔵野叢誌発刊に就き所感」の記事からは、読者が「武蔵野叢誌」を新聞と捉え、地域の重要なメディアととらえていたことを確認することができる。その記事では「武蔵野叢誌」を振り返り、「回顧すれば（中略）其の当時神奈川県における二大新聞として横浜なる毎日新聞と府中町なる武蔵野叢誌なりき叢誌は侃々の言、諤々の論、一世を風靡して時の政府を畏怖せしめたるもの⁽¹¹⁾」との評価をしている。これは、武蔵野叢誌が北多摩郡の地域独自の情報紙として先鞭をつけるものであったことを伺うことのできる記述である。

武蔵野叢誌は、第4号以降「雑報の記事を大幅に減らすことにより報道的要素を希薄に⁽¹²⁾」なるなど、新聞的側面が後退する経緯を辿る。しかし、このような地域独自の総合誌が北多摩郡で発行されていた状況は、週刊多摩新聞のような地方新聞が発行されることにつながる理由の一つとしてとらえられよう。

2. 週刊多摩新聞の地域と概要

(1) 週刊多摩新聞の地域

本項では、週刊多摩新聞が発行された1909年頃の神代村周辺の概況をみることによって、週刊多摩新聞の地域的位置づけについて考察したい。週刊多摩新聞の事務所は東京の西部、北多摩郡神代村（現調布市）佐須の祇園寺にあった。北多摩郡は「東京府ノ中央部ヨリ稍西武ノ平地ヲ占メ東ハ北豊島、豊多摩、荏原ノ三郡、西ハ西多摩郡ニ接シ南ハ多摩川ヲ隔テ、南多摩郡及神奈川県橋樹郡ニ相對シ北ハ埼玉県北足立郡県全県入間郡ニ界⁽¹³⁾」した位置にある。

神代村の1909年の人口は4452人。1901年から昭和に入るまで4000人台で推移しており、この時期にはまだ大きな変動はみられない。この地域は昭和前期に入り人口が激増していくが、明治末期においては大都市としての性格を持っていないことがここからわかる⁽¹⁴⁾。

産業の中では養蚕が重要な位置にあった。1900年の神代村周辺における養蚕農家の割合は神代村400/523戸（76%）、隣の調布町で250/616戸（41%）を数える⁽¹⁵⁾。そのため、養蚕などの地域独自のニュースが必要となっていたのではないかと推測される。週刊多摩新聞では地域情報の中に、養蚕に関する情報が多く取り扱われていることにはこうした背景が影響しているものと考えられる。

週刊多摩新聞が発行されていた時期にあたる1909年～1910年は、武蔵電気軌道株式会社の京王電気軌道株式会社として社名変更・会社が設立（1910年9月）し、その後電力供給や鉄道の敷設へ向かう契機となった時期にあたる⁽¹⁶⁾。これらの変化は、神代村・調布町地域が「東京の郊外」としての都市の性格を強めていく端緒となる出来事である。つまり、直前の週刊多摩新聞の発行時期は農村から都市へ地域が変貌する過渡期にあったとみることができよう。

(2) 週刊多摩新聞の特徴

ここでは週刊多摩新聞の内容構成や価格などの概要についてみながら、週刊多摩新聞の特徴について考察したい。本紙の内容は、評論やコラム、三多摩に関連するニュースの他、意見投書、市況、海外レポートや投稿による文芸（俳句・川柳、短歌・狂歌）などで構成されており、情報紙の枠を超えた幅広い紙面構成になっていた。なかでも、評論やコラムは、政治や農業、宗教など幅広いため、本紙の内容から、週刊多摩新聞は総合紙としての性格を持っていたと考えられる。本紙の特徴には、時期的には自由民権運動が下火になっていた1900年代の発行でありながら、自由民権運動の薫陶を強く受けていたことを挙げるができる。週刊多摩新聞に対する板垣退助の第1号への寄稿や、板垣の秘書であった和田三郎による板垣の意見掲載などに自由民権の影をみることができる。

次に、大新聞との価格比較から本紙をみたい。当時の新聞についての概要を知ることのできる史料として、日本電報通信社編纂発行の『新聞総覧』を挙げられる。ここでは、1910年発行の『新聞総覧 明治四三年度版』から、当時の大新聞の価格や広告と比較を試みることにしたい。

週刊多摩新聞の価格は、号数によって若干の上下はあるものの、ほぼ2.5銭～3銭前後であった。1909年当時の物価と比べると、米一升17銭（1909年）、銭湯3～2銭（1909年）・3銭（1910年）となっていることから⁽¹⁷⁾、本紙の価格は銭湯の入浴料とほぼ等しかったと推測される。当時の大新聞の価格については、東京朝日新聞で1枚2銭（一ヶ月37銭）、読売新聞は1枚1銭5厘（一ヶ月35銭）（いずれも1909年7月30日）となっていた。週刊紙と日刊紙の違いはあるが週刊多摩新聞が若干高いことが分かる。この価格設定からは、購読者層について、ある程度の対価を払っても地域情報を必要としていた層に読まれていたことが推測される。さらに、週刊多摩新聞のような地方新聞が成立できた理由については、養蚕による現金収入があったことも挙げられるのではないかと考えられる。

しかし、この購読料は常に集められていたわけではないようで、どの程度の支払いがあったかという購読料の実態には不明な点もある。それは1909年9月30日の第21号において、巻頭から経営状況に関する社告が出されていたことから伺うことができる。「三多摩郡は勿論隣府県に渉れる数十万里の読者諸君にしあればいちいち購読料の集金は実際に行はるべきものに~~あらず~~又初号より地方有力の方々へも引き続き送付し置きし分も有之本社は（中略）殆ど独力にて経営せしものなれば此際至急購読料払込被下度、又引続無代配布の方々はさらに購読仰付の御報に預り度此段徳義に訴へ御願申上候也⁽¹⁸⁾」との記事がその理由である。この記事からは週刊多摩新聞が一部で無料配布されていることや、中西悟玄により独立運営されていたこともわかる。この購読料に関する記事は第23号（1909年10月20日）にも掲載されており、購読料収入については、新聞運営上の課題となっていたといえよう。

(3) 週刊多摩新聞の広告

次に、週刊多摩新聞の広告についてみたい。それは広告収入が当時の新聞にとり、「新聞経営に就いて最も重きを置くところのもの」であり、「新聞の命脈は位置に繁りて広告収集の巧拙に在りと謂

ふも不可なし」という役割を持っていたためである⁽¹⁹⁾。そのため、週刊多摩新聞の活動をみる上で広告は欠くことのできないものであるといえる。

週刊多摩新聞の広告料は第1号で「21字詰め1行30銭」、第2号以降からは「21字詰め1行20銭」、第15号からは「19字詰め1行20銭」となっている。当時の他の東京に所在を構える21紙の同時期の行数・広告料を平均すると、一行17.75字・54.25銭である⁽²⁰⁾。最も高い万朝報で18行・70銭、最も安価な日本新聞で17行・45銭となっていることから、週刊多摩新聞が相当に安価な広告料を設定していたことがわかる。

表1は、『新聞総覧』（日本電報通信社編纂発行、1910年）より、1909年6月の東京を本拠とする新聞に出されていた広告を抜粋し、1909年6月に発行された週刊多摩新聞の業種別広告の出稿行数を対照させたものである。

週刊多摩新聞の広告に、『新聞総覧』の分類を適用すると、「売薬、化粧品、書籍、呉服、会社、決算、官庁、登記、学校、病院、雑品、出帆、雑件」の13項目において出稿されていることがわかる。業種による広告の割合について、他紙では売薬や化粧品の広告行数の割合が高いが、週刊多摩新聞においてそれらは低く、むしろ雑品及び雑件に関する広告が多いことが特徴と指摘できる。

内容別をみると、雑品の細目の分野は食品や生活雑貨といった日常使用する物品などから養蚕器具や肥料などの業務に使用する物品まで幅広く渡っている。特に日常使用の物品や雑件を中心に広告を集めており、売薬や書籍、官庁といった大新聞で多く出ている業種とは異なる広告を受けている。生

表1 新聞広告行数比較

新聞名	週刊多摩	東京毎日	報知	東京日々	読売	中外商業	東京朝日
売薬	100	10,233	12,799	6,350	3,008	3,244	10,350
化粧品	34	3,733	7,941	3,652	7,672	2,175	8,444
書籍	-	4,104	7,834	3,547	7,011	2,503	9,864
呉服	48	772	1,331	888	655	729	884
会社	187	1,328	1,812	1,974	1,006	4,571	1,837
決算	-	1,182	1,400	1,026	1,257	3,318	913
官庁	-	4,778	796	494	428	799	1,032
登記	-	830	-	-	-	3,354	-
学校	-	56	388	146	98	19	458
病院	134	1,346	4,235	1,859	3,331	845	2,383
雑品	542	4,529	7,423	2,092	3,214	2,169	5,487
出帆	-	1,475	120	4,659	-	4,947	2,470
雑件	286	1,082	4,607	2,431	1,414	2,903	4,212
計	1,331	35,448	50,686	29,118	29,094	31,576	48,334

(1909年6月『新聞総覧』日本電報通信社編纂発行、1910年、pp. 100-134)、(週刊多摩新聞)より作成)

活品が目立つ広告内容は、大新聞との違いであるということができよう。

次に広告主の所在地から、読者の及んだ地域について考察する。週刊多摩新聞の読者範囲については、第10号（1909年6月10日）の第二回美人投票募集記事から推測することが可能である。そこでは、「三多摩郡及豊多摩郡、北豊多摩郡、神奈川県橋樹郡等多摩川兩岸即ち本紙愛読者のある範囲に於てこれを募集す^[21]」とあり、神代村・調布町が含まれる三多摩郡、さらに隣接した地域の一部が読者の対象地域となっていたことがわかる。

読者の所在地域の広がりについては、広告依頼主の地域からも検証したい。図1は週刊多摩新聞第10号より、事務所所在地であった神代村佐須及び、広告主（委託販売物については取扱所）の場所を地図に示したものである。広告数を地域別に分類すると、全広告数は31件のうち調布町のものは14件、神代村のものは4件で、合計で18件である。調布町及び神代村の発行地域周辺の割合では業者数が半数以上を数えている。さらに、図1の広告主の地域分布は、週刊多摩新聞の事務所のあった佐須を起点としながら、街道に沿い東西に範囲が延びていることがわかる。このことから、週刊多摩新聞は神代村・調布町内の街道沿いの同一の生活圏が対象地域となっていたことを推測することができる。本項では、週刊多摩新聞は、安価な広告費設定で大新聞と異なる種別の地域性のある広告が集

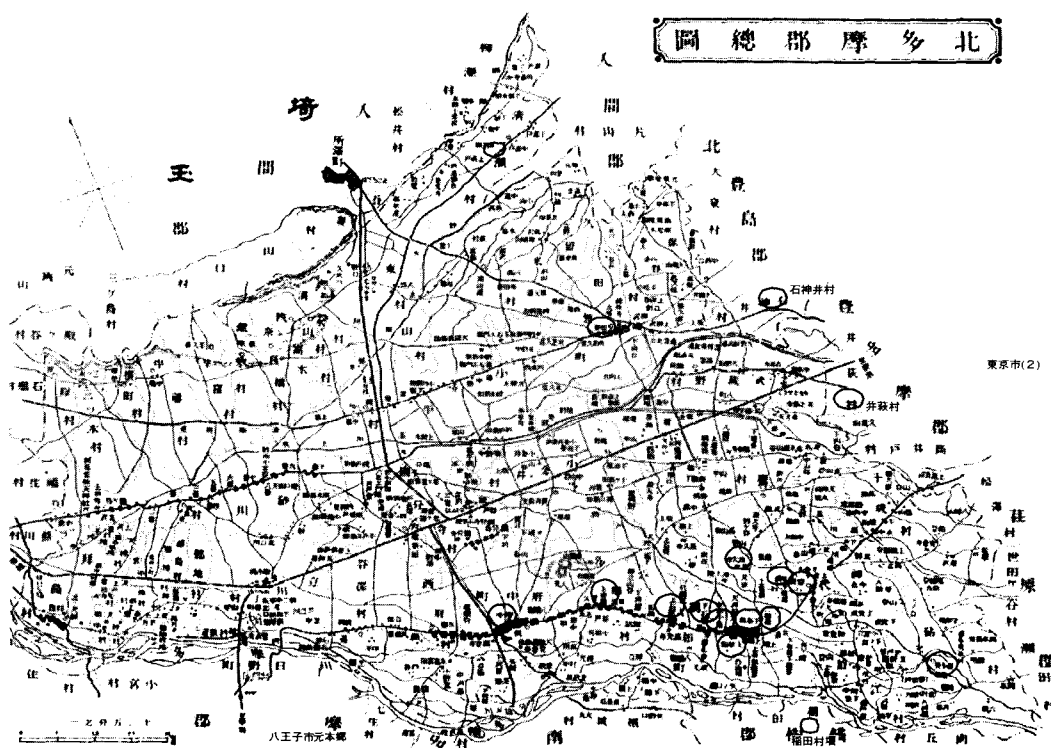


図1 週刊多摩新聞第10号（1909年6月10日）広告主地域分布
（『北多摩郡誌』1912年及び週刊多摩新聞より作成）

まっていることや、発行の関係地域が限られていることなど、大新聞とは異なる位置づけにあったことがわかった。

3. 週刊多摩新聞と投書

(1) 週刊多摩新聞の構成と投稿記事の位置づけ

週刊多摩新聞の内容構成の中で、特徴の一つとして数えることができるのが、投書である。社会学者の山本武利は投書について「読者と新聞の相関を集約的、象徴的に⁽²²⁾」あらわしたものであると述べたが、投書欄は、新聞読者の意見を紙面に反映する機会の一つとしてみるができる。そこで、本研究では読者投稿に着目し、紙面を分析することによって、週刊多摩新聞が読者に対して果たした役割について考察したい。

投稿記事が本紙中のどのような位置にあったのかをみるため、週刊多摩新聞の内容変遷についてとりあげる。第36号まで発行された本紙の10号ごとの内容構成の変遷は次の通りである。

- ・第1号（1909年3月10日）の主な構成
ニュース、論説、短歌、コラム、投稿募集記事、雑報、社告
- ・第10号（1909年6月10日発行）の主な構成
コラム、名所探勝雑記、ニュース、雑報、文芸、美人投票募集
- ・第20号（1909年9月20日発行）の主な構成
コラム、告示、ニュース、文芸、雑報、投書欄、美人投票
- ・第31号（1910年1月11日発行）の主な構成（30号は元旦の為形態が異なる）
コラム、ニュース、雑報、小説、投書欄、文芸

本紙の基本的紙面はニュースや雑報等の地域ニュースとコラムや投稿、文芸作品などの読み物によって構成されていることがわかる。投書は新聞と読者をつなぐことができ、読者が紙面に参加できる機会の一つであり、新聞紙上における双方向性メディアとしての機能の一端を担っていたものである。投書はコラムなどにおいて掲載され、投書欄や文芸欄などで、随時投稿記事を受け入れるページが多く作られていた。このことから投書が重視されていたことが推測できる。

明治末期における新聞は、大新聞では1890年代後半のハガキ投書ブームが終わり、報道新聞中心への移行している状況にあった⁽²³⁾。週刊多摩新聞において投書欄が「多摩百面相」と名前が変わり拡大された1909年7月30日の第15号と同日の東京朝日新聞、読売新聞においても投書欄が縮小されている。さらに、東京朝日新聞では投書欄は設けられておらず、読売新聞でも投書欄の7本掲載にとどまっていた⁽²⁴⁾。それに対し、週刊多摩新聞では23本の投書が掲載されており、紙面での扱いは大きいものとなっていた。

次に、週刊多摩新聞の方針や投稿募集記事をみることによって、本紙が投書欄・投稿記事をどう位置づけていたかについて考察を試みたい。例えば、週刊多摩新聞が本紙について、ニュースを配信するのみのメディアとして位置づけていないことは、記事の中にも随所に見ることができる。

その記事の一つとして挙げられるのが、週刊多摩新聞社員が入社の際において述べた「善行美言を發揚して悪行者の燈台となり、社会教育の補助者たらんと欲す⁽²⁵⁾」という活動方針である。ここからは週刊多摩新聞の社員が週刊多摩新聞の持つ社会教育的役割に着目していたことが伺え、本紙に対して何らかの社会教育的意義を期待して発行を行っていたことが推測される。

本紙が「野に叫ぶ声」に期待し紙面運営を目指していたことは、第一号に掲載されている「発刊の辞」から読み取ることができる。そこでは「野に叫ぶ声に耳を藉さん正しき道に侘りて歩まん⁽²⁶⁾」と記載されており、本紙の方針は「野に叫ぶ声」を集めることにより発行を進める姿勢にあったとみることができる。

さらに、週刊多摩新聞において、意見投稿と並ぶもう一つの記事募集の中心となっていたのが創作作品、特に狂歌や都々の募集である。創作作品の掲載は、創刊から最後まで通して掲載されており、紙面を作る重要な役割を果たしていた。

(2) 投書欄「百面相」について

週刊多摩新聞の読者投稿については、主に三つの形式のものをみることができる。一つ目はコラムや政策提言など、不定期に掲載されていた長文の投書、二つ目は文芸欄であり、三つ目が本項で取り上げる「百面相」と題された投書欄である。投書欄は週刊多摩新聞が1909年7月12日に発行された第13号に「投書集」として始められた短文の投書欄である。連載途中で「多摩百面相」「百面相」「投書籠」とタイトルを変更しながらも、最終第36号までほぼ毎号欠かさず掲載が続けられており、もともと掲載回数の多い連載の一つとして数えることができる。

本欄には、短文による投書であることから、他の投書文などの投稿記事に比べ、より多くの人々の声を掲載できる。そのため、本欄は新聞紙面中、発行者と読者の関係について、双方向性を持たせる役割を担っていたと推測される。「百面相」の投書内容は非常に幅広く、社会問題に対する意見、週刊多摩新聞への要望・意見、地域でのうわさ話、日常生活での不満、日々の生活に関する感想などを集め掲載されていた。なお、行数からも投書欄の拡大をみることができる。第13号（1909年7月12日）では20行だが、次第に増加をみせ、最も多い時には110行（1909年8月30日第18号）、投書欄の掲載行数で平均57.5行に及んでいる。

(3) 投書記事の役割

当初記事の役割をみるため、新聞投書の具体的な内容について取り上げる。投書の中でも、読者からの発信としての性格を持つ記事の一つとして挙げられるのが、週刊多摩新聞の記事や紙面への感想・要望などである。新聞そのものや紙面に対する感想には、「百面相は照魔鏡なりいよいよ出て、いよいよ面白し猛虎一声山月高しの趣きあり（谷保生）」（1909年9月30日第21号）や、「多摩新聞が出た為下民は大悦び助かります（大賛成家）」（同21号）などをみることができる。

他にも「富澤仙士と谷田部氏との水力電気論面白い双方反対の理由が十分ある（砂川の住人）」

(1909年8月30日第18号)といった意見がある。この水力電気論に関する投稿は、1909年8月20日の第17号(富澤仙士「現時の水力電気事業」)の東京市の電力事業に関する賛成意見、及び1909年7月30日の第15号(神城子「水力電気建設」)の電力事業に対する反対意見に関する両論併記の投書への感想である。投書に対する反応投書も紙面で展開されていた。

さらに、本紙への要望には、取材を求める投稿を多くみることができる。例えば、「当町には新聞三面の材料が沢山あります早く素破抜いて下さい(田無町青年)」(第15号)や、「千歳村には色々不正なことがあります探って載せて下さい」(1909年10月20日第23号)などの投稿がある。これらはニュースの中心地域である調布市域以外の取材要望に関する投稿であり、本紙が地域ニュースを取り扱うメディアとして期待をされていたことや、意見を受ける場として機能していたことがわかる。

紙面への意見に対して、記者の返答を掲載している投稿も見受けられる。「多摩新聞が廃刊する噂がある本当ですか(伺生)」「決してソナナことはありませぬ五年でも十年でもやる積りです(記者の一人)」(いずれも1909年9月10日第19号)のという投稿からは、読者からの要望が一方的なものだけではなく、記者からの返答が紙面を通して伝えられていたことがわかる。紙面を通じて読者投稿へのフィードバックする機能を持っていたことが特徴といえよう。

次に意見投書を取り上げる。「百面相」での投書の多くは社会問題や日常生活での不満に対する意見を述べたものである。その対象範囲は幅広く、社会に対する批判、日常生活での不平不満を訴えるものなど、多岐に渡っている。

具体的には「三鷹村と武蔵野村の両村長に申し上げ候上連雀塚より田無町へと通ずる道路と来たら汚水常に溢れ通行の難儀は勿論流行病発生の折柄何とか処分願上候」(第19号)や「境調布間の人力車賃金は一定して居ない其筋にては注意しないのですか(小僧)」(1909年11月10日第25号)、などの投稿を挙げることができる。これらの投書からは、投書欄が社会の不満を述べることのできる場としての意義を持っていたと考えることができる。

さらに、本欄で最も多くを占めていた投書は、地域名を挙げた日常の雑談に関する投書である。本紙の美人投票の感想や身近な商店等の善し悪し、地域のうわさ話など、特定地域に関する情報を集中的に取り扱っているものは、地方新聞にみられる特徴的な記事であるといえる。例えば、「府中の魚元は料理が好くて安い」(1909年8月20日第17号)や、「ラッパの豆腐屋さん毎日甲州街道へ来ますよ」(1909年12月10日第28号)という投書である。

地方新聞において雑談に関する投書の意義は、読み手、書き手双方の地域が近いことにより、居住地に密着した情報をやり取りできる点にある。週刊多摩新聞は調布周辺における幹線道沿いの近隣地域に広がっており、地域情報に関する投稿の掲載は必要であったと推測される。さらに、本紙の雑報欄でも、多くの地域ニュースが掲載されている。これらの記事は大新聞と異なる、読者(投稿者)同士の地理的距離が近い為に成立する、地方新聞独自のものといえるのではないかと。

本項では投書欄について取り上げたが、週刊多摩新聞の持つ大新聞と異なる特徴をみる事ができた。一つは、新聞の投書欄が縮小に向かう中、週刊多摩新聞では、新聞自体が積極的な記事の募集を

行っていたことである。さらには紙面の中での投稿記事に比重をかけて充実を図っていたことも、週刊多摩新聞の特徴といえよう。

投稿記事は出版者側が選定するため、投稿者の意見がそのまま掲載されない制限はある。しかし、意見を発信することができ、なおかつ紙面に対して要望を出す機会があったことは、地方新聞は読者にとって発信できるメディアとしての意義があったと考えられる。さらに大新聞が取り扱わない身近な情報を交換する場として、投書欄が役割を果たしていたことも重要な点として指摘できよう。

まとめ

本研究では、北多摩郡神代村を中心として発行されていた週刊多摩新聞を素材に、明治末期における学習・文化活動の一形態としての三多摩の地方新聞の活動について考察した。中でも、読者からの発信・交流の場としての地方新聞の役割について注目してきた。

1. 明治期の三多摩における地方新聞の位置づけについて検討した。明治末期においては、地方新聞の発展の時期にあったことがわかり、そこでは、全国で地方新聞の隆盛がみられ、三多摩の地方新聞発生の背景となっていたことを推し測ることができた。
2. 週刊多摩新聞の関わった地域について、新聞の概要を検討した。特に、大新聞との広告内容や地域の比較により、本紙の影響が及んだ地域について考察を行った。その結果、週刊多摩新聞は大新聞と異なり、より生活に密着した形で展開されていたことが明らかとなった。
3. 週刊多摩新聞の記事構成の中から、投書欄について着目し、週刊多摩新聞の持つ読者に対する役割について検討を行った。大新聞と比較すると、週刊多摩新聞では投稿欄を重要視していたことがわかった。投書欄はニュース記事とは異なり、読者から新聞に自らの意見を発信できる場としての役割を備え、なおかつ紙面への要望を出すことが可能であること、さらに身近な情報を交換する場としての役割を果たしていたことがわかった。

特に、大新聞において投書が縮小される流れの中、地方新聞においては投書欄のような発信を可能にする場の選択肢が存在していたことは、読者にとって意義あるものであったといえよう。まとめれば明治末期の地方新聞の役割について、一地方新聞の事例を素材として検討してきた結果、読者にとって地方新聞とは、大新聞とは異なる情報の充実がなされ、内容構成による情報入手源として、さらに発信したい人々の意欲を受け止める存在であったことがわかった。

しかし、本研究では意見を発信する場としての役割を帯びていた投書欄が、読者や投稿者に対してどのような影響を及ぼしていたのか、資料の関係もあり十分明らかにすることができなかった。さらに、この時期の三多摩の地方新聞についてはさらに残存しているものが相当あると考えられ、これについての考察を今後の課題であるとした。

なお、三多摩においては、その後大正時代にかけて各地で短歌・俳句などの文芸誌などの発行が盛んになり、地域文芸運動の動きが生じている⁽²⁷⁾。明治末期の地方新聞は、基盤をつくるものとして重要な役割を果たしたと考えられるが、これらの解明も今後の課題とした。

- 注(1) 門奈直樹『民衆ジャーナリズムの歴史』（講談社学術文庫、2001年）、p.20。
- (2) 土屋礼子「メディア史研究の動向—明治大正期—」（『メディア史研究』メディア史研究会編、ゆまに書房、1996年5月）、p.152。
- (3) 〈週刊多摩新聞〉第1号、1909年3月10日。本史料は1970年に調布史談会より400部限定で復刻されたものである。
- (4) 『調布市教育史』調布市市史編集委員会編、調布市教育委員会、1982年、p.196。他にも「地域の文化に寄与する点が多かった。」（『調布市史』下巻、調布市市史編集委員会編集、調布市、1997年、p.508）などの言及がある。
- (5) 『調布市史』下巻、調布市市史編集委員会編、調布市、1997年、p.508。
- (6) 山田公平「創設期の名古屋新聞—近代地方新聞史研究—」（『メディア史研究』第1号、1994年3月）、p.75。
- (7) 『日本新聞発達史』小野秀雄、大阪毎日新聞社、1922年、p.357。
- (8) 内務大臣官房文書課『大日本帝国内務省第二十六回報告』、1912年7月、p.249。
- (9) 「多摩の印刷史」刊行会編『多摩の印刷史』東京都印刷工業組合三多摩支部、1985年、p.223。
- (10) 「武蔵野叢誌」第一号、武蔵野叢誌社、1883年、p.1。
- (11) 神城生「武蔵野叢誌発刊に就き所感」（『週刊多摩新聞』第三号、1909年4月1日）。
- (12) 遠藤吉次「解説」（府中市立郷土館編『武蔵野叢誌（下）』府中市教育委員会、1978年。1884年5～11月に成文舎から発行されたものを復刻）、p.388。
- (13) 『北多摩郡誌』北多摩郡役所、1912年、p.1。
- (14) 「明治四二年事務報告書・基本財産」（『調布の近現代史料』第三集、調布市市史編集委員会、1995年）、p.150。
『行政史料にみる調布の近代史料』（調布市市史編集委員会、1986年）、p.299。
- (15) 『調布読本—近代調布の歩み』改訂二版、調布市郷土博物館編集発行、1999年、p.2。
- (16) 『調布市史』下巻、調布市誌編集委員会編、1997年、調布市、pp.443-449。
- (17) 岩崎爾郎『物価の世相100年』読売新聞社、1982年。
- (18) 多摩新聞会計部「社告」（『週刊多摩新聞』第21号、1909年9月30日）。
- (19) 『新聞総覧』明治43年版（日本電報通信社編纂発行、1910年、p.518）。
- (20) 『新聞総覧』前掲、pp.1-4。
- (21) 「三多摩郡及附近美人投票募集」（『週刊多摩新聞』第10号、1909年6月10日）。
- (22) 山本武利『近代日本の新聞読者層』1981年、法政大学出版局、p.364。
- (23) 『近代日本の新聞読者層』前掲、p.362。
- (24) 〈朝日新聞〉1909年7月30日、〈読売新聞〉1909年7月30日。
- (25) 前田耕造「入社の際」（『週刊多摩新聞』第22号、1909年10月10日）。
- (26) 「発刊の際」（『週刊多摩新聞』第1号1909年3月10日）。
- (27) 1910年代から1920年代にかけて、三多摩の農村青年の心をゆさぶり、自己覚醒を迫った文芸運動の潮流があったことが新井勝紘により明らかにされている。（新井勝紘「草の根のデモクラシー」（『多摩のあゆみ』第41号、多摩文化資料室編、多摩中央金庫、1985年11月）、p.160。